

2025年8月26日(火)～11月9日(日)
東京国立博物館 本館14室

Thematic Exhibition

Theatrical Masks of Animals

特集

動物

物の

の

仮面



◎ 行道面 五部浄居天

鎌倉時代・14世紀 和歌山・丹生都比売神社伝来 C-454

Gyōdō Mask: Gobujōguten

Kamakura period, 14th century

Passed down at Niutsuhime Shrine, Wakayama

仏を供養する際に人びとが練り歩く、行道という仏教芸能で使用される仮面です。仏を表わすのが一般的ですが、象や獅子など仏にゆかりのある動物を表現した行道面も少なくありません。

飛鳥時代、大陸から日本に仏教芸能である伎楽が伝わりました。それ以来日本では、宮廷の仮面劇として発展した舞楽や、室町時代に大成した能、狂言といった、仮面を用いる多様な芸能が栄えてきました。基本的に仮面は人を表わしますが、人のほかにも神や鬼など多種多様な仮面が使われ、その造形もさまざまです。なかでもひとときわ目を引くのが、動物の仮面です。

本特集では、芸能の垣根を越えて、動物をテーマとした仮面を一堂にご覧いただきます。動物の顔を今日でもわかりやすく写実的に表わした狂言面の猿や狐から、鳥を擬人化した舞楽面の崑崙八仙、獅子でありながら、かなり人間に近い容顔である能面の獅子口のほか、すばめた口に筒状に丸めた紙をはめて蚊に見立てるうそぶき、滑稽な表情を動物の精に見立てる賢徳など、一見して動物とは思われないものまであります。人びとは動物を演じることを楽しみ、芸能に登場する動物に親しみを感じていたのかもしれません。多彩な表現による動物の仮面を通して、人びとの動物への眼差しを体感していただければ幸いです。



In its long history, Japan has seen a blossoming of a range of performing arts in which performers would put on masks. They include *gigaku*, a Buddhism-related performing art that entered the country during the Asuka period (593–710) via continental Asia; *bugaku*, which developed as a masked theatrical performance of the imperial court; and *noh* and *kyōgen*, which were perfected in the Muromachi period (1392–1573).

Among various masks used for these traditional performing arts of Japan, masks representing animals are especially remarkable. This exhibition presents a variety of animal-themed masks used for traditional Japanese performing arts. We hope that these distinctively featured masks of animals will give you a glimpse into how people of the past observed animals.

能面

能は、大陸の芸能に由来する猿楽を源流とし、室町時代に大成された仮面芸能です。主役であるシテの多くが仮面をつけて、霊や神を中心とする多岐にわたる役柄を演じます。基本的には人の姿にもつぎますが、龍神や鬼、土蜘蛛といった人の姿をとらない役の場合には、両目を見開き、牙をむき出しにした激しい表情の仮面が使われます。



◎ 能面 黒髭
「金春」陰刻
安土桃山時代・16世紀 金春家伝来 C-1544
Noh Mask: Kurohige

Inscribed "Konparu"
Azuchi-Momoyama period, 16th century
Passed down by the Konparu Troupe
頭に赤い鬘と、龍戴という冠をつけ、能「竹生島」や「大社」などに登場する龍神の役に用います。



土蜘蛛
国立能楽堂第247回普及公演「土蜘蛛」
平成16年(2004)8月14日
出演：56世 梅若六郎(僧、土蜘蛛の精)、
武田宗和(源頼光)

能「土蜘蛛」では、武士 源 頼光を苦しめる土蜘蛛の精が顰の面をつけます。加えて赤い髪を振り乱し、紙製の蜘蛛糸を投げ広げるなど、圧巻の演目で知られます。顰は、ほかに「大江山」「羅生門」などの演目で鬼にも用いられます。

◎ 能面 顰
室町時代・15～16世紀 金春家伝来 C-1556
Noh Mask: Shikami
Muromachi period, 15th-16th century
Passed down by the Konparu Troupe



狂言面

能と同じく、猿楽に起源をもつ芸能ですが、能とは異なり滑稽さやおかしさを描く喜劇が多く、精霊や動物を演じる際には仮面を用います。とくに猿や狐はそれぞれ写実的に表わされ、日本における動物彫刻の一例としても貴重です。一方で、人と動物の中間的な表現や、あえて特定の動物に似せないことで、幅広い動物の演目に用いられる賢徳などの仮面もあります。



能狂言絵巻(鞍猿)
江戸時代・18世紀 A-10185
"The Kyogen Play The Monkey Skin Quiver"
from Illustrated Noh and Kyogen Plays
Edo period, 18th century

狂言に登場する動物のなかで、「鞍猿」「猿髯」など数多くの演目にみられるのが猿です。とくに「鞍猿」の子猿は狂言役者の初舞台ともされ、人の物まねに始まり、クライマックスでは大名から賜った衣装を着て扇を持って舞を踊ります。



狂言面 猿
江戸時代・18～19世紀 C-199
Kyogen Mask: Saru
Edo period, 18th-19th century

蚊相撲

国立能楽堂第6回能楽鑑賞教室「蚊相撲」
平成元年(1989)6月28日
出演：大藏基義(大名)、善竹十郎(太郎冠者)、
大藏基嗣(蚊の精)

口をすばませたうそぶきの面は、「ひょっとこ」を思わせますが、古くは伎楽面や舞楽面にもみられる形を受け継ぎます。案山子や蛸などさまざまな役柄に用いられますが、狂言「蚊相撲」に登場する蚊の精の役では、口に長い紙筒をあてて針を表わすなど、個性的に使われます。



狂言面 うそぶき
安土桃山～江戸時代・16～17世紀 C-180
Kyogen Mask: Usobuki
Azuchi-Momoyama-Edo period, 16th-17th century

能狂言絵巻より(釣狐)
江戸時代・18世紀 A-10185
"The Kyogen Play Fox Trapping"
from Illustrated Noh and Kyogen Plays
Edo period, 18th century



狂言「釣狐」では、狐そのものと、白蔵主という僧に化けた狐が、異なる仮面を用いて演じられます。狐は大きく口を開いて下顎が動く仕様であるのに加え、舞台上では着ぐるみを用いて迫真の演技をみせます。一方、人間に化けた姿では両目が三角形で歯をむき出しにした表現から、人間になりきれない狐のあわれさとおかしさが表わされます。



狂言面 狐
江戸時代・享保18年(1733)
文化庁
Kyogen Mask: Kitsune
Edo period, 1733
The Agency for Cultural Affairs

狐が化けた姿

狂言面 白蔵主(伯蔵主)
江戸時代・17世紀 文化庁
Kyogen Mask: Hakuzōsu
Edo period, 17th century
The Agency for Cultural Affairs



釣狐
国立能楽堂第35回特別企画公演「釣狐」平成20年(2008)12月10日
出演：深田博治(白蔵主、狐)、2世 野村萬斎(獵師)

狂言面 賢徳
江戸時代・17世紀 C-82
Kyogen Mask: Kentoku
Edo period, 17th century

狂言「止動方角」の馬、「横座」の牛、「犬山伏」の犬、「蟹山伏」の蟹の精霊などさまざまな役に使用します。



舞楽面

奈良時代、アジア各地の音楽をもとに成立した雅楽^{がく}のなかで、舞踊^{ぶよう}をともしなうものを舞楽と呼びます。仮面を使用する演目もあり、登場するキャラクターには人が多いものの、なかには龍を表わした納曾利や、鶴をモチーフにした仙人である崑崙八仙など、人ではない役柄もみられます。宮廷や寺社の法会^{ほうえ}などで上演されて各地に普及し、能狂言の源流となりました。



◎ 舞楽面 崑崙八仙

平安時代・長久3年（1042）
奈良・手向山八幡宮

Bugaku Mask: Korobase
Heian period, 1042
Tamukeyama Hachimangū Shrine, Nara

中国の伝説上の山である崑崙山^{こんろんさん}に住むという鶴の仙人。8人で地上に降りて舞を踊るといいます。演目では4人が手をつないで舞います。鶴でありながら嘴^{くちばし}は短く、むしろ伎楽面の迦楼羅^{かろうら}に似ています。もとは嘴の先に鈴を吊るして、鶴の鳴き声を表わしました。



応永舞楽図巻（模本）より

狩野〈晴川院〉養信模 江戸時代・文政3年（1820）

原本：室町時代・応永10年（1403）A-2416

Bugaku Performances Depicted in the Ōei Era (Copy)
Copied by Kanō Seisen'in Osanobu
Edo period, 1820



◎ 舞楽面 崑崙八仙

鎌倉時代・建暦元年（1211）
愛知・真清田神社

Bugaku Mask: Korobase
Kamakura period, 1211
Masumida Shrine, Aichi



◎ 舞楽面 納曾利

鎌倉時代・承元5年（1211）
愛知・真清田神社

Bugaku Mask: Nasori
Kamakura period, 1211
Masumida Shrine, Aichi

陵王は、美男子^{びなんし}で知られた中国・北齊時代の蘭陵王^{らんりやうおう}という武人が、龍をかたどった仮面をつけて戦った故事にもとづきます。陵王と対で舞うことが多い納曾利は、雌雄2頭の龍が、戯れながら天に昇るさまを表わしており、ともに顎は紐で吊り、目も動くように作られます。



舞楽図屏風（陵王と納曾利）

狩野永岳筆 江戸時代・19世紀 A-10171

Bugaku Performances
By Kanō Eigaku
Edo period, 19th century



◎ 舞楽面 陵王

鎌倉時代・承元5年（1211）
愛知・真清田神社

Bugaku Mask: Ryōō
Kamakura period, 1211
Masumida Shrine, Aichi



* 作品名称の前に付した◎は重要文化財



特集 動物の仮面
令和7年（2025）8月26日発行

執筆：西木政統、川岸瀬里 撮影：吉岡由哲 翻訳：君波妙子（以上、東京国立博物館）
デザイン・制作・印刷：アイワード 編集・発行：東京国立博物館
©2025 東京国立博物館 Tokyo National Museum